（四）「史記」匈奴傳にいふ、「其秋單于怒渾耶王休屠王居西方、爲漢所殺俘數萬人、欲召誅之、」と。

（五）沈欽韓撰「漢書疏證」卷二十九。

（六）同書卷三十四。

（七）「史記」卷六秦始皇本紀には「十年……春、王乃迎太后於雍而入咸陽復居甘泉宮」といひ、又「十四年……韓非使秦秦用李斯謀、留非、非死雲陽」と記す。

（八）「通志」卷一百九十八。

（九）「程氏考古編」（「函海」第十四—五册所收）卷八。

（一〇）「圖書集成」神異典第九十二卷、佛像藝文三所收。惟ふに本篇は程大昌の著「演繁露」中に編入せられてをるものであらう。併し余は未だ該書に接する機會を持たないから斷言することは出來ぬ。

（一一）「增一阿含經」卷二十八。「觀佛三昧海經」卷五。「根本說一切有部毗奈耶雜事」卷十七、卷三十八。

（一二）松本文博士論文「佛像の美術史的研究」（「哲學研究」第一卷第一號所收）參照。

（一三）Friedrich Hirth—Ueber Fremde Einflüsse in der chinesischen Kunst. S. 11.

（一四）H. G. Rawlinson—Intercourse between India and the Western World. P. 70.

（一五）V. Smith—Early History of India, P. 207.

（一六）H. G. Rawlinson—Monograph on the Oxus. J. R. G. S., PP. 504-13.

（一七）拙著「西域の佛教」五五—六頁、六三頁參照

（一八）Gardner—Catalogue ofGreek and Indo-Scythic Coins in the B. M. II,9-12. III, 1. V, 8.

（一九）F. Hirth—Ueber Fremde Einflüsse in der chinesischen Kunst. S. 23.

叢說

ビスマルクの研究と大戰

文學博士　原　勝　郎

大戰開始の翌年即ち一九一五年にビスマルクに關する數多の著書が、一時に公けにされた。これは彼のベルンハルヂは勿論、ニイッチェやトライチケが引き合ひに出されて、戰爭の已むを得ざる所以の說明者になされたと同樣で、此度の戰爭も畢竟するに現在獨逸の當路者の物好きからして惹起したのではなく、ビスマルクの遺業を紹述したる自然の結果として出來したのであるから、假りにビスマルクを九泉に起こして現下の局に當らしめた所で、やはり國の存亡を賭して戰爭を遂行する外はあるまい、吾人はビスマルクなる大偉人の功績に對しても、飽くまで戰勝の効果を收め、彼の遺した偉業を擴大しなければならぬと論じ、以て國民の戰志を鼓舞せむとする念に基いたものである。但し此等ビスマルクに關する著述の特に一九一五年に多くして、其前後に於て左程にないに就いては、別の理由がある。即ち同年はビスマルクの誕生の一八一五年からして正に百年目に當ると云ふ事が其原因をなしのだ。

偉人の歿後、其誕生の百年目、又は百の若干倍數に當る年に、其偉人を忍びて、或は其行實を叙し、批評し讃嘆することは、ビスマルクの場合にのみ限りたることではない。ざらにある例だ。されればビスマルクに特異なる點は、單に斯かる機會を俟ちて研究され稱揚さるゝのみではない。其在世中からして既に彼に對する渴仰的論述者の絕ねぬことである。而して一方に熾熱の渴仰者があれば、同時に他方に執拗なる反對者の多いことも、亦免れざる數であらう。此外にビスマルクの味方でもない敵でもない者と雖、歷史研究の上の必要からして、彼の如き偉人を等閑に看過すること能はず、研究的立脚地からして彼に關し述作した人々も亦甚だ多い。

抑もビスマルクが批評の的、研究の對象となつ

たのは、其一八六二年に入閣して以後のことだ、然かしそれも最初の間は、當路の大臣でありさへすれば不世出の英雄でなくとも、屢々人の口の端にのぼるのと同じ理由によつて主として問題とされたのだ。況んや議會を敵として憲法に横車を押し、軍備擴張を成し遂げたビスマルクであつて見れば、猶更毫も不思議なことではない。然るに彼の奮鬪によりて擴張された軍備が其功を奏し、一八六六年墺國との戰爭は普國の勝利に終り、北獨逸聯邦が組織されてからして、伯爵に叙せられた彼の名聲は頓に揚がり、彼に關する國内の著述が俄然として增加したのみならず、外國にても同樣の著書がポツ〳〵公けにさるゝやうになつた。けれども若しビスマルクにして其事業茲に終りを告げたならば、恐らく彼は一個異彩ある政治家として獨逸政治史の數頁を飾るに過ぎなかつたらうと思はれる。

所が彼の成功はトン〳〵拍子に踵を接し、七〇—七一年の戰役に於て佛國を敗つて獨逸帝國を建設してからは、彼の隆々たる名聲は全歐を被ひ、從つて國内よりも寧ろ外國に於て、ビスマルク及び其政策を主題とした著書が激增し、中にはそれからして獨逸文に飜譯されたものもある。ビスマルクが詩に歌はれ、又は戲曲の主人公として脚色さるゝに至つたのも、亦此獨佛戰爭後一八七一年頃からしての事である。此ビスマルク熱は其後年を逐ひて少しづゝ冷却しかけたが、伯林會議の議長として其怪腕を揮つてから、又もや内外の注意を引いた。一八七九年に於て彼を捉へて題目とせる著書の多くあらはれたのは、即ちそれが爲めである。

此後三年を經、一八八二年に至つて、ビスマルク關係の著書が夥しく刊行された。これは帝國建設以來既に滿十ケ年を經過し、彼の經營にかゝる

諸種の平和的事業、例へば人文戰爭、鐵道政策、保護貿易政策、保險法其他の社會政策等が、批評の材料として研究者に提供されたのみならず、外交上の彼の大事業たる三國同盟が、此年伊太利の參加によりて出來上がつたからでもあらう。然しながら此一八八二年ですら、ビスマルク關係著書刊行の數に於て、遠く一八八五年の多いのに及ばなかつた。

一八八五年四月一日はビスマルク第七十回の誕辰である是より先き一八七五年にも彼の六十回の誕辰を機としてあらはれた著述があつたけれど、其數は誠に少かつたが、今第七十回の誕辰に至つて莫大なる數に達した。獨逸國内で公にされたもののみでも、殆ど五十種の多きに及んで居り、ビスマルクの勢望が此時を以て其の絶頂に達したとしても決して過言とは云へぬ位である。然るに此年あまりにビスマルク熱が昂上した爲め、翌一八八六年には彼に關する著書の刊行を見ること、甚だ少かつたが、其次の一八八七年からして、又々增加し、爾後は毎年二十種以上の刊行を見ぬ年はなく、就中一八九二年には彼の執政以來二十五年になつたといふキツカケを以て、殆ど一八八五年に等しい程多數の關係刊行物を見るに至つたのである。これ一つには、是より二年前にビスマルクは既に退職をしたのであるから、彼を以て公生涯を完結した人として、或は特殊的に、或は概括的に、之を叙述論評し得る機會に達したからでもあらう。

此後三年、一八九五年となつて彼の第八十回誕辰がめぐり來つた。すると誕辰まで僅々三ケ月の間に彼の祝福を兼ねて公にされた著書が、八十種の多きに達し、剩へ同年を以てビスマルク關係書目なるものが出版された。これは僅々七十頁の小冊子ではあるが、兎に角生前に自己に關して斯か

る書籍目錄の刊行されるのを目擊するに至つた點に於ては、ビスマルクを以て古今獨歩としてもよからう。他にはあまり見ぬ例である。ビスマルクは其の後更に三年をながらへ、一八九八年を以て歿したが、それが爲めに彼に關する研究は、衰へる所が、却つて益々盛になつた。加之彼の棺を蓋うたあと、恩怨の關係次第に遠かり嚴密なる學術的見地からして彼の事業を批評し得るやうに向いて來たから、彼歿後の關係著書の中には、價値ある研究を含むものが多くなつて來た。而してビスマルクの在職は、三十年に垂んとし、政治上經濟上社會上の問題で、彼の指を染めないものは殆ど無つたと云つてよい程であるから、彼の歿後重要なる問題の起こる度毎に、彼の曾て施設した所のものが直ぐ引き合ひに出されて論評さるゝを例とした。政策以外彼一身に關しても、彼の家系、幼時青年時代、フランクフルト駐劄時代、入閣の顚末家庭生活、閑居時代等細別されたる題目に關しての研究が公にされた。專門に彼のみを研究することを目的とした雜誌の刊行されない點に於てナポレオンに一等を輸するけれども、ビスマルク年曆及びビスマルク年鑑（ヤールブック）の或る期間刊行されたのは、此方面に於て全く機關の缺如せぬことを示す。總じてビスマルク關係著述の種類の多きことは實に驚くに堪へたるもので、人をして尙ほ此上に書くべき題目の殘りて居るかを怪ませる位である。「校閲者としてのビスマルク」と題せる著書はブッシユの著なる「ビスマルク及び其左右の人々」の原稿の一部を、ビスマルクの書き入れと共に其儘複製したるものであるが、此の如きは、如何にビスマルクに關しての穿鑿が微に入り細を究めて居るかを伺ふに足る好材料であらう。

ビスマルクの研究が此の如き來歷であつて見れば、讀者は一九一五年に至つてビスマルクに關す

る著者のまた盛に公にされたことが決して偶然でないことを容易に理解せらるゝであらう。獨逸書舶來の少い今日、其等の著書の主なるもののみをすら紹介すること、至難なことであるが、曾て本誌に簡短に紹介されたデルブリュック教授著の「ビスマルクの遺産(エルベ)」と題するものゝ如きは、蓋し其白眉中の白眉と云ふべきものであらうと思はれる。此の書の前半はビスマルクの公生活を略叙し、後半に於て彼の政策が後人によつて如何に繼承されたかを說いたもので、大体彼の遺業は後人によつて益々擴大されたので、一見後人によつて全く顚覆された觀のあるものと雖、仔細に之を研究すれば、ビスマルクの施設の後日獨逸帝國の方針と背馳するのは、これ單に其表面上の背馳で、而かもそれすらビスマルクの本意に出でたのではなく、周圍の事情は彼を强ひて不本意の政策を執らしめたのだ、彼の精神は其實行と反對の方向にあつたので、其精神の方が却りて後人に繼承され、表面上のみ背馳の觀を呈することになつたのだと論じ唯一つビスマルクの方針と全く別途に出でたのは其の後發展した獨逸の植民政策と、及び之に關聯した海軍の擴張であつて、これのみはビスマルクの遺業でないとして、キルヘルム二世に花を持たして居る。著者はビスマルクが主義(ドグトリヒール)に拘泥する政治家でなく、所謂實際政治家(レアールポリチカル)であつたことを反覆力說して居るのであるから、若し之を敷衍すれば後日の海軍擴張や植民政策に就いても、之を以て少くもビスマルク精神に合するものと辨護することが容易である。然るに著者は之を以て全くビスマルクの遺業にあらずとして、例外に措くのは、蓋し解し兼ぬることである。其外に著者は、獨逸の親露政策を論じ、獨逸が露國と接近しやうとする場合には、由來波蘭に對して抑壓政策をとつた最近にも獨逸は波蘭に對し强壓を加へつゝあつたの

は、これ露國と戰ふ意思のなかつたことを表明すると論じ、以て大戰勃發の責を露國に嫁して居る。巧妙なる論法ではあるが、首肯し難い曲論だ。何故かといふに、從來親露の爲めに波蘭を抑壓した例が如何に顯著であるにしても、波蘭政策は一方に於いて普國の內政問題であつて、少しも外國との關係からのみ其政策を左右さるべきものではなく、露國と何等の關係なしに波蘭に對して抑壓政策を執ることは、普國にとりて極めてあり得べき事であるからである。此の如く此書は獨逸史界の耆宿デルブリユック敎授の著述としては遺憾なる點頗る多く、人をして羊頭狗肉感を起こさしむる箇所少かざるものなるが、然かし僅々數十頁を以てビスマルクの公生活の全部を論し了れる手際に至りては、流石の大家尙ほ馬上顧盼の勇あるを示すもので、ビスマルク關係圖書の從來旣に汗牛充棟なるに關せず更にそれに一異彩を添へたものと評してもよからう。

吾人の見を以てすれば此度の大戰は獨逸の政治家がビスマルクの精神なくして唯其術策のみを繼承し、軍人の張梁を拒ぐことが出來なかつたからして遂に勃發を見るに至つたもので、ビスマルクの遺業が繼承恢弘さるゝどころか却りて破壞されたものだと考へる。若しビスマルクをして獨逸の現局に當らしめたならば、恐らく戰爭を避けたことではあるまいか。此點に於て吾人の意見は全くデルブリユック敎授のそれと反對なのである。さりながら斯かる議論は要するに是非の判斷を俄に下し難いもので、ビスマルクに關する研究が益々深くなるにつれて、いくらかつゝ明るく成るべき筋のものである。ビスマルクに關する著書は此後と雖まだ〳〵增刊を見ることであらう。吾人は彼に關する研究の進むことは、單に獨逸の爲めのみならず世界の爲めに稗益する所大なるべきを深く信ずるものである。